

笑顔。それは未来への希望

水谷 孝次 みずたに こうじ
アートディレクター

笑顔の力を信じて

被災地を訪れた。

そこには大きな希望があった。

震災から40日あまり経った4月23日、私は
いわき市にいました。がれきが散乱する海辺の町に、「笑顔」を
届けるために――。「MERRY PROJECT」と銘打った活動を始
めて、もう十年以上になります。「笑顔。そ
れは未来への希望」という信条のもと、世界
各国を回って子どもたちの笑顔の写真を撮
り、楽しさや幸せや夢を語ったメッセージを
集めて発信し、笑顔をプリントした傘を一斉
に開く、といった試みが続けてきた私は、
今、被災地でこそ、このプロジェクトを決行
しようと思ったのです。傷跡もまだ生々しい被災地に笑顔を引き出
しに行くというプランには、不安もありまし
た。「ちょっと早すぎるんじゃない？」と周囲から言われもしました。しかし私は経験か
ら強く感じるものがあつたのです。これまで
訪れた震災直後の四川やスマトラ、貧困にあ
えぐスラム、戦争の爪痕の残る町々――そこ
にいる人々がみな、いかに笑顔を必要として
いたかを。そうした場所に入っていくとき、私はいつ
も「心のギア」を入れます。生半可な気持ち
で笑顔の傘を開いても、「何しに来たんだ」
と言われかねません。だから、戦場に突撃す
るかのような決死の覚悟で臨むのです。そん
なこちらの気持ちを通じたとき、変化が起こ
ります。そこにいる人々の笑顔が返ってきま
す。鏡のように、笑顔は伝染するものなので
す。

く、喜ばしく思うのです。

しかし日が経つにつれて、今度はさらに深
い絶望が訪れます。喪つた家族、流された家、
失職、風評被害。そうした現実を前にして、
心は真つ暗な闇に包まれます。そんなとき、
私がMERRY PROJECTの取材にかけ、隣
で寄り添い「ハイ、ニッコリ！」と笑顔の撮
影をすると、「あの日から今まで笑つたこと
も無かつた、しかし、今日は笑つた……。今
日はとても楽しい。幸せだー」と……。希望が見えにくかつた
震災以前の日本ここから分かるのは、「絶望が大きいほ
ど、それに比例して希望も大きくなる」とい水谷 孝次 Koji Mizutani

アートディレクター

1951年名古屋市生まれ。'99年より笑顔のコミュニケーション
「MERRY PROJECT」を開始。これまで世界26カ国 30,000人以上の
笑顔とメッセージを取材。東日本大震災支援プロジェクト「MERRY
SMILE ACTION」を展開中。近著に『デザインが奇跡を起こす』
(PHP研究所)がある。うことです。何もかも失つた人たちだからこ
そ、百の絶望の後には、百の希望があるとも
言えるのです。MERRY PROJECTが、逆境にある場所を
多く訪れてきた理由もそこにあります。絶望
の中にある場所こそ、笑顔でただそこにい
ることが、大きな希望をもたらすのです。
対して、もつとも笑顔の浸透しにくい場所
だと感じたのが、震災以前の日本でした。物
質的充足と他者に対する優越だけを追い求め
る社会に、笑顔の入り込む余地はないよう
も感じました。では日本人は幸福だったのかというと、実
際はその反対です。競争に疲弊し、心を病
み、年間三万人も自殺する日本社会は、明ら
かに不幸であると思います。そこには悲惨な
境遇の国とはまた別種の悲劇、つまり豊かな絶望が大きいほど
希望は大きくなる今回もやはりそうでした。避難所で笑顔の
傘を開くと、皆さんの顔がパツと輝くのが分
かりました。沈んだ表情だった子どもたちが
私の構えたカメラに向かって笑いかけ、震災
以来一度も外に出られなかった老夫婦が、日
光の下で「生きてよかった」と喜び、私の
差し出したカードに希望の言葉をつづって
くれました。「わざわざこんなところまで来
て、笑顔を届けてくれてありがとう。一瞬で
も、つらいことを忘れることができうれし
い」。いくつもの笑顔とメッセージに、私のほう
が強く励まされたかのような気がしました。そして同時に感じ取つたのは、そこにいる
人々の深い絶望と、それに相対する希望で
す。皆が同時に、あるいは交互に、絶望と希
望とを心に抱いていたのです。災害時の激しい恐怖が去つた後、人は「生
きているだけで幸せ」という気持ちになりま
す。氷点下はまだ冷え込んだ避難所で温かい
スープを味わいながら、何万人もの命が失わ
れた中でこうして生かされていることを有難物質と数限らない情報とが隙間なく詰めこま
れているがゆえの、「希望の見えにくさ」が
ありました。今回の震災は
新たな希望の幕開けそのように考えると、今回の出来事は、新
たな展望の幕開けなのかもしれません。日本
はこれから物質的には若干貧しくなるかもし
れませんが、しかしそれはマイナスではなく、
実は大きな希望の始まりなのではないでしょ
うか。これから得るもののひとつひとつを愛
しむとき、日本人はこれまで忘れていた本当
の豊かさを手に入れるのではないでしょう
か。その「愛しさ」「豊かさ」は、物に関して
だけ発生するものではありません。それより
もはるかに大きな喜びをもたらすのは、暖か
い笑顔と優しい言葉――仏教で言うところの
「和顔愛語」です。「布施の際に何も持ってい
なければ、ただ笑顔と優しい言葉を送るがい
い、同じ量だけ笑顔と優しい言葉が返って
くる」とブッダは説いたそうです。正にメリー
ゴーラウンドです。私もそれを信じて、これ
からも悲しみの中にある被災地を訪れ続ける
つもりです。笑顔の力で、喜びや希望、生への意志を呼
び起こす。それが日本を再生させる力になる
と、信じてやみません。